

第6学年 朗読を活用して「豊かな読み」をつくる指導

指導者 県立教育センター指導主事 小林 順一

協力者 新潟市立大淵小学校教諭 曇 信子
(現任教 新潟市立東山の下小学校)

授業仮説

「豊かな読み」のステップにおける朗読を重視し、どのように表現することが聞き手によく味わえる読みになるか思考しながら音読することは、情景を鮮明に写しだし、しかも、人物の気持ちを浮き出させて、読みと、自己表現の楽しさを感じ得ることができる。

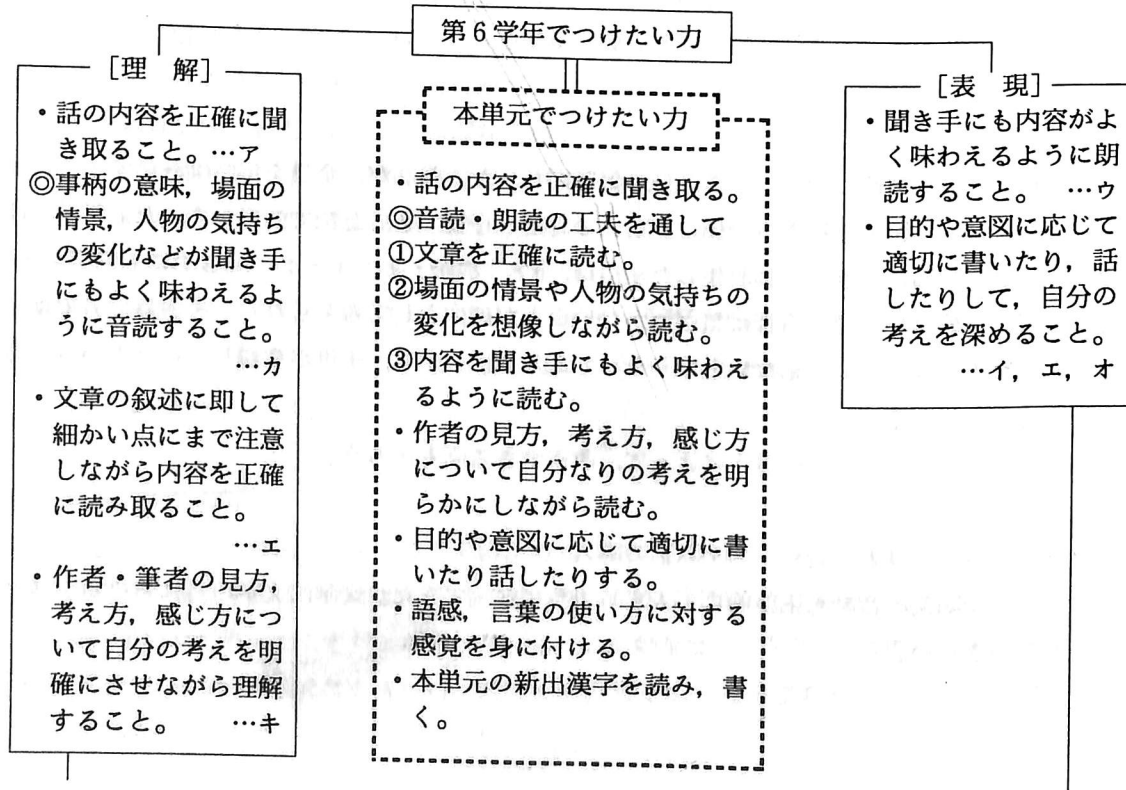
1 単元名 注文の多い料理店(東京書籍 5下)

2 指導目標

音読・朗読の工夫を通して、情景や人物の気持ちを豊かに想像しながら内容を読み取り、感想をまとめることができるようにする。

3 指導の構想

(1) つけたい力(理解学習において)



[言語事項]

- ・第1学年から第6学年までに配当されている漢字を主として、それらの漢字を読み、その大体を書くこと。…イ(ア)
- ・言葉の抑揚、強弱などに注意して正しい発音で話すこと。…ア(ア)(イ)
- ・主語と述語を結び付けたり、これらの語を助けたりする語句などの働きに気付くこと。…エ(ウ)
- ・語感、言葉の使い方に対する感覚などについての関心を深めること。…エ(エ)

(2) 教材観

ア 主題について

生命を粗末にすること、見栄をはること、軽薄であること、自分のことしか考えられないこと、欲が深いこと、うそをつくこと等の要素を持った人間を厳しく否定している精神がこの物語に一貫して流れている。しかし、ただこれらのことを単純に打ち砕くのではなく、「注文の多い料理店」をセットし、“注文のやりとり”を通して、登場人物の見方、考え方、感じ方など、言動を通してリアルにしかも写実的に描き出しているところに価値の高い文学性を見出すことができる。したがってここに主題があると考えられる。作者宮沢賢治の思想の深さ、人間性の豊かさが溢れた文学作品である。人間と自然の共存を希求する精神の崇高さにもふれていきたい。

イ 構成と内容について

大きくは次のように三つの場面に分かれる。

- 1の場面…二人の紳士が狩りに出て、道に迷う。
- 2の場面…二人の紳士が次から次へと山猫の注文に応じていく。
- 3の場面…二人の紳士が二匹の犬と猟師に助けられる。

さらに、2の場面は細かくは次のように五つの場面に分けられる。

- ①二人の紳士が西洋料理店を見付ける。
- ②二人の紳士が[1]～[4]の注文に応じていく。
- ③二人の紳士が[5]～[10]の注文に応じていく。
- ④二人の紳士が[11]の注文に応じ、[12]で気付き、最後の[13]の注文に泣く。
- ⑤二人の山猫の子分の会話を聞いて、二人の紳士がさらに泣く。

各注文に対する二人の紳士の対応は次のようになっている。

- [1]…どなたもどうかお入りください。決してごえんりょはありません。…喜んで中に入る。
- [2]…ことに太ったおかたや若いおかたは、大かんげいいいたします。…大喜びで進む。
- [3]…当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。…戸を開けて中に入る。
- [4]…注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。…自己解釈する。
- [5]…お客様がた、ここにかみをきちんとして、それからき物のどろを落としてください。
…もっともと応じる。

- [6]…鉄ぼうとたまをここへ置いてください。…なるほどと応じる。
- [7]…どうかぼうしと外とうとくつをお取りください。…しかたなく応じる。
- [8]…ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにとがったものは、みんなここに置いてください。…自己解釈して応じる。
- [9]…つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。…自己解釈して応じる。
- [10]…クリームをよくぬりましたか、耳にもよくぬりましたか。…応じる。
- [11]…料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐたべられます。早くあなたの頭にびんの中のこう水をよくふりかけてください。…応じる。
- [12]…いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうか、体じゅうに、つぼの中の塩をたくさんよくもみこんでください。…逆であることに気付く。
- [13]…いや、わざわざご苦労です。たいへんけっこうにできました。さあさあ、おなかにお入りください。…泣き出す。

このように最後のどんでん返しを読みのおもしろさを表出させている。二人の紳士のこの一連の言動と料理店に入る前の考え、あやうく助かったときの思いの変わらぬ性格、心情から、作者の意図する思想を読み取らせていきたい。

ウ 表現上の特徴

情景描写・会話・注文の文には特有の文体とリズムが見られるので、音読・朗読には適した教材である。また、かけことばと解釈の仕方の違いがおもしろく、内容に深みを増している。

(3) 児童の実態(男子12名、女子13名)

ア 全般的な傾向

発言する児童がかたより、国語に対する興味関心は、ある子とない子との差があり、全般にはやや低い。理解する能力も差が生じている。男子において、1名の児童はすこぶる読書を好み、読解力が高いが、他の児童は、読書に対する興味は薄く、物語文の読み取りにおいて心情面の読み深めが苦手である。

また、授業中に集中できない子が4名いる。およそ発言は思い付きの傾向にあり、目的や意図を十分に考えない内容である。意図的・計画的に思考していく力の向上が望まれる。女子は、書き手の見方、考え方、感じ方を追求し、自分の思考を決定付け、その考えをよく発言する児童と、考えを深めることができず、ほとんど発言できない児童がいる。主題に迫る読み取りについても、数人しかできていない。

本単元では音読や朗読を効果的に活用し、語や語句、文、文章の細かい点にまで注意しながら読みを深めることを通して内容を読み取る力を高めていきたい。物語文の読みの楽しさを感じ得ることの経験の積み重ねが、読書への興味関心を高めることにつながると考える。

イ 個の実態と指導の手立て

主な児童についてのみ掲載する。(上位2人、中位2人、下位2人、計6人)

| 番号・名前 | 国語科の読解力 | 音読の傾向 | 指導の手立て | 変容 |
|-------|--|--|--|---|
| 1 A児 | <ul style="list-style-type: none"> 読解力はいよい。 物語のおかれている状況を社会の様子と結びつけて考えることができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 正確に読め、速さや強弱に気を付けて気持ちを付けて音読することができる。また、話し言葉に工夫がある。 朗読力もある。 | <ul style="list-style-type: none"> さらに、細かい叙述にも着目させるために抑揚の観点読みを身に付けさせ文章全体を把握する力を高めていきたい。 読みの機会を与える。 | <ul style="list-style-type: none"> イントネーションを付けて全文を読み、聞き手に味わえる読みができるようになってきている。 |
| 2 B児 | <ul style="list-style-type: none"> 初発の読みで主題にせまっていく読み取りができる。 人物の気持ちをよくとらえて内容理解を確かめている。 | <ul style="list-style-type: none"> 正確に音読できる。 声量は乏しいが、読みの工夫ができる。 聞き手にも分かるような朗読もできる。 | <ul style="list-style-type: none"> 聞き手に内容が味わえる読みの在り方を追求させることで、本人の力と、聞き手の力とともに高められるようにもっていききたい。 | <ul style="list-style-type: none"> 朗読による表現の楽しさを会得した様子である。そのことが自信になり読みの力も向上している。 |
| 3 C児 | <ul style="list-style-type: none"> 自分の考えをいつもよく発言し、ものごとを筋道立てて考えている。 読書好きである。 | <ul style="list-style-type: none"> 気持ちを込めた読みが工夫できる。 初めての文章でも、内容を考えた音読ができる。 | <ul style="list-style-type: none"> 音読・朗読のリーダーとして育てていきたい。読みを適切に表現する力を高めるために、聞き手に分かる読み・味わえる読みの在り方を追求させる。 | <ul style="list-style-type: none"> 考え方に柔軟性が付いてきている。 音読・朗読には積極的に取り組み貢献した。 |
| 4 D児 | <ul style="list-style-type: none"> 発言力が出てきて、それに比例して人物の気持ちにせまった思考ができるようになってきている。 日記を書き、文章を書くことも好きである。 | <ul style="list-style-type: none"> 正確に読め、人物の気持ちを出そうという音読の仕方を、強弱やイントネーションなどで工夫している。 | <ul style="list-style-type: none"> 読みが分かってきているので、この機会に朗読の楽しさを感じとらせたい。 伝える読み、分かる読み、味わえる読みのステップを理解させて、確かな朗読の力を育てていきたい。 | <ul style="list-style-type: none"> いつも楽しく学習に取り組み、理解する力や表現する力を確実に伸ばしている。 朗読力は聞き手に味わえる読みまで深まった。 |
| 5 E児 | <ul style="list-style-type: none"> 直感力があり、人物の心情は読み取れるが、集中力に欠け、思いつきの発言があり、自分の考えに固執するときがある。文字は乱雑。 | <ul style="list-style-type: none"> あまりつかえずに読めるが、読みを工夫していこうという意識はない。 | <ul style="list-style-type: none"> 一つ一つの言葉と言葉の関連を把握させた上で、強弱・大小などの観点で読みを工夫させ、文章の内容が表れる音読の力へと高めていきたい。 | <ul style="list-style-type: none"> 読みの工夫について興味・関心を持つようになってきている。 表現力は少しずつ伸びている。 |
| 6 F児 | <ul style="list-style-type: none"> 文章の読み取りがよくできていない。 聞かれていることがよく理解できていないことがある。 人物の気持ちなどはとらえられていないことがある。 | <ul style="list-style-type: none"> まだ、つかえることが多い。 正確に読み取れず、工夫した音読・朗読の在り方が分からないでいる。 | <ul style="list-style-type: none"> 音読の正しい読みを繰り返させることで、読みに抵抗をいだかせないようにしたい。読みにおもしろさを見出せば、チャンスである。短文の音読をする機会を意図的に与える。 | <ul style="list-style-type: none"> 正しい読みに努力することで、書いてあることの内容を確かに読み取ることができるようになってきている。 |

(4) 指導の構え

— 研究仮説 —

物語文の指導過程の中に「音読・朗読指導システム」を取り入れ、音読・朗読を効果的に活用することは、場面の様子や人物の気持ちを想像し、内容を豊かに読み取り、「ことばの力」をつけることができる。

これを受けて本単元では、次のように授業仮説を設定している。

『「音読・朗読指導ステップ」における第3ステップの「豊かな読み」に視点を当て、朗読を重視し、これをどのように表現することが聞き手によく味わえる読みになるか思考しながら音読することは、情景を鮮明に写しだし、しかも、人物の気持ちを浮き出させて、読みと自己表現の楽しさを感じ得ることができる。(P11「授業方針」掲載)

これは次の考えから導いている。

- 子供は第1・2学年において、第1ステップの「正しい読み」を習得してきている。
- 子供は第3・4・5学年において、第2ステップの「確かな読み」を習得してきている。
- 子供は第4学年において、「豊かな読み」の「聞き手にも内容がよく伝わる読み」を習得してきている。
- さらに、子供は第5学年において、「聞き手にも内容がよく分かる読み」を習得してきている。

ちなみに、「聞き手にも内容がよく伝わる読み」とは、内容、事実関係、言葉の意味をおおよそ把握することができる読みを指す。

また、「聞き手にも内容がよく分かる読み」とは、内容、事実関係、言葉の意味をはっきりととらえることができる読みを指す。

そして、「聞き手によく味わえる読み」とは、内容、事実関係、言葉の意味を十分感得することができる読みを指す。

具体的には次の3点を視点としている。

- ① 場面の様子の具現化（自然や情景描写が目に見えるように読みを工夫すること）
- ② 人物の言動の実際化（人物描写や会話文からその人の思いや姿勢、感情が滲み出てくるように読みを工夫すること。）
- ③ 物語の内容の一体化（読み手が書き手と同化しつつ文章から受けた体感を、自分なりに精一杯表出するように読みを工夫すること。）

これらを踏まえて、読むことと、自己表現の楽しさを自ら感得していくことを目標レベルに置く。

なお、これは、指導ステップにおける「(ウ) 自分なりの表現で、楽しみながら読む。」のレベルを鑑みている。つまり、この3点ができることはとりもなおさず、(ウ)の項目に到達している読みと受けとりたい。

授業仮説の検証の手立てについては本時の計画(P77～P86)に記す。

4 指導計画(10時間)

| 次 | 時 | 指導内容 | 学習活動 | 音読の手法 |
|---|---|---|--|--|
| 一 | 1 | <ul style="list-style-type: none"> 内容を想像すること。(5W1Hをおさえる) | <ul style="list-style-type: none"> 題名「注文の多い料理店」から物語の内容を想像して書く。 | <ul style="list-style-type: none"> 想像した内容を文章に表し、それを朗読させる。 |
| 二 | 2 | <ul style="list-style-type: none"> 文章を正しく音読すること。 会話文や情景描写の読み方を工夫し、人物の気持ちやその変化を読み取ること。 | <ul style="list-style-type: none"> ○1の場面を読む。 二人の紳士の考え方や性格について、二人の会話から読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 「ぜんたい、～やってみたいもんだんな」「しかの～たおれるだろうね」の二人の会話文を強弱・抑揚の観点読みを工夫させて、二人の残虐な姿勢を読み取らせる。 |
| | 3 | <ul style="list-style-type: none"> 聞き手にも内容がよく味わえるように朗読すること。 | <ul style="list-style-type: none"> ○2の①の場面を読む。 「風がどうとふいてきて～鳴りました。」から、ファンタジーへの誘いを読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 「風がどうとふいてきて～鳴りました」を語り口調で工夫させることで、幻想の世界への誘いを感じとらせる。 二人の紳士の会話を役割読みで読ませて心境を読み取らせる。 |
| | 4 | | <ul style="list-style-type: none"> ○2の②の場面を読む。 二人の紳士の注文に応じる言動から、単純さ、軽薄さ、見栄っぱりな人間性を読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 一つ一つの注文に対する反応の仕方(特に「」文)を役割読みで多用し、二人の紳士のとらえかたを読み取らせる。 |
| | 5 | | <ul style="list-style-type: none"> ○2の③の場面を読む。 二人の紳士の注文に応じる言動から、物欲・名誉欲などの見栄や軽率な考え方を読み取る。 | <ul style="list-style-type: none"> 一つ一つの注文に対する反応を地の文、会話文の役割読みで多用し、二人の紳士が深みにはまっていくなまじりを把握させる。 |

| | | | | |
|---|----|-----------------------|---|---|
| 二 | 6 | | ○2の④の場面を読む。 ・注文が自分たちへされていることに気付いた二人の紳士の動揺ぶりを読み取る。 | ・注文11, 注文12, 注文13に対する対応の仕方が変化していることを, 強弱, 抑揚, 大小の観点で検討読みをさせることで, 二人の紳士の絶体絶命の心境を把握させる。 |
| | 7 | | ○2の⑤の場面を読む。 ・二人の山猫の子分の言動から, 山猫の親分の性格や考え方を読み取り, それに対応する二人の紳士の狼狽ぶりを読み取る。 | ・山猫の子分二人のやりとりを比較読みで検討させることで, 山猫の親分の性格を想像させる。 ・「泣いて泣いて泣いて泣いて二泣きました」を強弱の観点読みを工夫することで二人の心情を想像させる。 |
| | 8 | | ○3の場面を読む。 ・助けられた二人の紳士の言動から少しも改心していない様子を読み取る。 | ・正確な読みを徹底して行ってから, 一人読みで何人かの児童に朗読させて, 「おうい, おうい, ここだぞ, 早く来い。」の読みの検討に「なぜにこの言葉がさげられるのか」を考えさせて, 二人の紳士の変容がないことをとらえさせる。 |
| 三 | 9 | ・聞き手によく味わえるように朗読すること。 | ・朗読発表会を聞き, 「注文の多い料理店」の理解を深める。 | ・一人読み, 役割読み等で朗読に親しませて, 作者の思想の深さを感じとらせる。 |
| | 10 | ・感想をまとめること。 | ・作者の考え方について自分なりの考えを文章にまとめる。 | ・感想文を音読させて, 読書への楽しみやおもしろさに気付かせ他の作品を読もうという意識を持たせる。 |

5 本時の計画（1／10時間）

(1) ねらい

物語をつくる楽しさを味わうようにする。

(2) 展開の構想

ここでの主眼は、一人一人の子供が「注文の多い料理店」という題名より、自由な発想で短編を創作する楽しさを感得することである。

子供たちは読み手の立場に立つという経験は常日頃から積み重ねてきている。しかし、書き手の立場に立つという経験は少ない。物語の続き文を創作するというような経験は少なからず持ってはいるが、初読の前にタイトルのみで「創作する」という活動は少ないのではないか。

特に、本作品は逆転の発想がおもしろいだけに、それに照らして今回は初めに「書く」という活動をセッティングすることとする。

内容決定の基本的なポイントとして次のように示す。

- ・どんな料理店でもよいが必ず内容の中に「料理店」が登場することとする。
- ・登場人物は人間でも、動物でもよい。
- ・話の内容も自由とするが主題は押し出すようにする。

「注文の多い料理店」という題名は二通りの受け取り方ができる。それは“料理を注文する主は誰か”ということで決定されてくる。この曖昧さが物語をおもしろくしている。

児童の経験からしては“注文するのはお客の方である”ということが何の疑いもなく意識されていて、決して“注文するのは料理店の方である”という発想はしない。おそらく、この題名を与えて自由な発想で想像させた場合、作者のような逆の思考的発想・表現の仕方で進めた物語文は望めないであろう。しかし、それでいいと考える。ここでは、児童が素直に自分の世界を「注文の多い料理店」という題名を借りて表すことができれば、ねらいは達成されたと考えたい。したがって、意図的に内容を決定付ける指示は一切しないこととする。ただし、自分なりに物語の中で一番表現したいこと（主題に当たること）は、表すことだけ押さえさせる。

書き方の方法としては、いつ、どこで、だれが、何を、何故、どのように（どんな考えで）、どうしたのかという5W・1Hの原則をおさえさせ、構成として起承転結の4段落とするように進めることとする。800字を目安とし、所用時間は30分とる。（推敲を含める）15分はいくつかの作品を朗読発表させて、書く立場における物語の楽しさを味わわせる。

ペンの進まない子供には図を作成することを薦める。これは構成を基に書きやすさを生むためにである。また、予定時間内に仕上がらなくてもよいことにして、心理的なプレッシャーはかけないことにする。

(3) 展開（略）

(4) 評価

楽しく物語づくりに取り組むことができたか。

5 本時の計画(2/10時間)

(1) ねらい

二人の紳士の会話文の比較読みを通して、ひとりよがり、見栄っ張り、しかも残虐な面を有する気持ちを読み取ることができるようにする。

(2) 展開の構想

人間性を探るには形式から入る場合と内容から入る場合があるが、ここでは、ずばり考え方・感じ方を表出している会話文の検討から想像させるようにもっていきたい。もちろん、形(身なり)からも、その人なりを想像させて、両方から二人の紳士の人間像を把握させることとする。

① 中位児童の二回の指名読みから、より正しい音読が意識できるようにする。

一回目は口形、発声・発音、句読点の観点を注意させて音読させてから、語句の意味を把握させる。二回目は語感を意識させて正しい文章読みをさせる。

次に、各自に正しい読みを練習させる。その次には、一斉読みで本文を正しく音読させて、1場面のあらかたを把握させる。

② 初めの二人の紳士の会話のやりとりを強弱・大小の観点で工夫し、二人の紳士の考え方・思いをとらえることができるようにする。

初めに紳士の様相を把握させる。

次にそれぞれの紳士の話し言葉の中で一つだけ強めて気持ちが表れるように注意することを指示して音読させる。

A…「(a)ぜんたい、ここらの山はけしからんね。(b)鳥もけものも一びきもいやがらん。(c)なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだな。」

B…「(d)しかの黄色な横っ腹なんぞに、二、三発おみまいもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。(e)くるくる回って、それからどたっとおれるだろうねえ。」

予想として、Aにおいては(a)の「けしからんね」、(b)の「一びきも」、(c)の「なんでも」「タンタアーン」が上げられるであろう。(a)(b)では、目的が達成されないいらだちの気持ち、(c)ではやたらめったら目的のためには手段をえらばずという野放図で野蛮な意志をとらえてくれるであろう。また、Bにおいては(d)の「横っ腹」「ずいぶん」、(e)の「どたっと」に集中するであろう。(d)からは標的をしぼることのいやらしさ、(e)からは、生命をもてあそぶ残虐な心をとらえてくれると考える。

③ 本文を上位の児童に朗読させて、二人の紳士の性格・考え方をまとめさせることができるようにする。

ここでは、第1、第2ステップを踏まえての朗読なので読みのたけた児童に指名し、朗読の良さに気付かせたいと考える。

(3) 展開(略)

(4) 評価

二人の紳士のひとりよがり、自然の生命をもてあそぶ気持ちを読み取ることができたか。

5 本時の計画(3/10時間)

(1) ねらい

幻想の世界への入口の部分の音読の工夫を通して、二人の置かれた場面の様子を想像することができるようにする。

(2) 展開の構想

ここから、ファンタジーの世界へ入っていく。それだけに冒頭の文章は大切に扱い、場面が変わったことを感じとらせたい。

① できるだけ大勢の児童に指名読みをさせ、正しい読みを徹底させるようにする。

この場面は短いことがメリットである。音読の時間は1分10秒前後であるので5人の児童には読ませたい。その際には正しい読みのポイント三つを意識させる。

② 山の中の情景と二人の紳士のひとりよがりな考え方を、比較読み・役割読みを通して読み取らせることができるようにする。

初めに、「風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。」の文を幻想の世界への誘いとしてとらえさせるために、次のステップを踏みたい。

1…「どう」の意味を把握させた上で、「どう」をどう読むかを検討する。

ここでは大小・強弱の観点で工夫させる。

2…「草は?」「木の葉は?」「木は?」の投げ掛けで「ザワザワ」「カサカサ」「ゴトンゴトン」の読みを工夫させる。

ここでは役割読みの形式で回答の部分の音質と調子を考えた観点読みを指示する。

3…通して一人読みをさせて、イメージ化を図る。

次に、二人の紳士の前半の会話文には二人の考えの共通したところが表れているので、これらの共通部分に線を引かせてから、共通した部分の音読を役割読みの中で工夫させて、二人の姿勢・考え方の同じことを把握させる。

その次に、二人の紳士はこのレストランに入ったか入らなかったかを予想させる。ここでは、おそらく何のためらいもなく「入った」ことを全員の子供が予想するであろう。そこで、その根拠を明らかにするためにどの叙述に目を向けたらよいか強弱の観点で読みを工夫させる中で見付けさせる。

最後に、看板の表示から気付いたこと・想像したことを発表させる。英語と日本語の両方で書かれているという配慮。イギリスの兵隊の身なりと西洋料理との結び付け。犬と山猫の対比。猫という名の持つ意味。等々があげられるであろう。

③ 群読で音読の楽しさが感得できるようにする。

(3) 展開(略)

(4) 評価

ファンタジーの世界への読みを意識することができたか。

5 本時の計画(4/10時間)

(1) ねらい

二人の紳士の注文に応じる言動から、ひとりよがりの考え方や見栄っ張りな様子を読み取ることができるようになる。

(2) 展開の構想

ここは、注文のイントロの場面である。「これから、いくつかの注文をしますが、よろしいでしょうか。」と山猫は打診しているのである。ここに気付かない軽率な人間性を感じ取らせていきたい。

① 正しく文章を読むことができるようにする。

まず、一文リレー読みで38のセンテンスをつないでいく。読みの正しさを押さえたところで、指名読みをさせる。その際に注文のみ他の児童に読ませる。その後、一斉読みで正確な読みを徹底する。

② 一つ一つの注文に反応する一組一組の会話文を役割読みを多用し、より、紳士の気持ちに合う読みを工夫させて、二人の紳士の見栄や軽率さを読み取ることができるようにする。

4人グループで、地の文、注文、紳士A、紳士Bの役割読みの読みの工夫をさせて、それを全体の場で発表し、聞き手から読みの工夫で感じたこと・想像したことを聞くこの場面は次の四つに分ける。

- 1…「二人はげんかんに立ちました。～〔①どなたもどうかお入りください。決してごえんりょはありません。〕～その意味だ。」
- 2…「二人は戸をおして、中へ入りました。～〔②ことに太ったおかたや若いおかたは大かんげいいたします。〕～両方かねているから。」
- 3…「ずんずんろうかを進んでいきますと、～〔③当軒は注文の多い料理店ですから、どうかそこはご承知ください。〕～大通りには少ないだろう。」
- 4…「二人は言いながら、その戸を開けました。〔④注文はずいぶん多いでしょうが、どうかいちいちこらえてください。〕～テーブルにすわりたいもんだな。」

順番に読み手・聞き手を交換し、読み進めていく。これは、音読の主体者の工夫はもちろんであるが、聞き手の耳を鍛練することも意図している。表現としての朗読は聞き手にも読み味わえるように読むことが要求されているからである。

この場面のおもしろさは何といっても、山猫の打診に知ったかぶって有頂天になっている二人の紳士の滑稽さであるが、ここまでの読みでは、そのことに気付かなくてもよしとしたい。今後の読み進めの中で気付いていくと思うからである。

③ 一人読みで聞き手を意識した朗読ができるようにする。

(3) 展開(略)

(4) 評価

二人の紳士の軽薄で見栄っ張りな性格を把握できたか。

5 本時の計画(5/10時間)

(1) ねらい

二人の紳士の注文に応じる言動から、名誉欲や物欲などの見栄や軽率な考え方を読み取ることができるようにする。

(2) 展開の構想

次から次へと、二人の身なりについての注文が出されてくるが、何の疑いの気持ちも持たず、かえって自分たちなりに都合のいいように解釈していく様子が描写されている。不思議だという気持ちすら起さない単純さが露出されていて滑稽である。ここでは「えらい人」に固執する二人の思いと注文との対比を役割読みで表現することで内容を理解させていきたい。

① 指名読みと一斉読みの繰り返しでより正しい読みが定着できるようにする。

全員の子供が文章を正しく読むことができるようにさせたい意図である。

② 見栄っぱりであるがゆえに逆注文であることに気付かない二人の紳士たちの滑稽さを音質を変えた役割読みを工夫させることでとらえさせることができるようにする。

身なりへの注文は次の六つである。

1… [⑤お客様がた、ここにかみをきちんとして、それからき物のどろを落としてください。]

2… [⑥鉄ぼうとたまをここへ置いてください。]

3… [⑦どうかぼうしと外とうとくつをおとりください。]

4… [⑧ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、さいふ、その他金物類、ことにとがったものは、みんなここに置いてください。]

5… [つぼの中のクリームを顔や手足にすっかりぬってください。]

6… [クリームをよくぬりましたか。耳にもぬりましたか。]

「うるさいことは」「変なことが」と注文の内容の質が変わったことに対して示唆しているにも関わらず、二人は「もっとも」「なるほど」と受容している。ここだけ読むと、一見本当に“紳士”だと錯覚させられるところであるが、「ブラシを板の上に置くやいなや、そいつがぼうとかすんでなくなつて。風がどうと部屋の中に入ってきました。」の一文は幻覚であること、つまり有り得ないことを有り得るようにふるまう二人の紳士の行動の無意味さを象徴させようとしている。この一文の持つ意味を重要視したい。また、ここでの注文には、「偉い人」「貴族」への執着心が注文を受容していることに気付かせるためにそれぞれ注文ごとの役割読みを丁寧にさせる。

③ 一人読みで朗読させて内容理解を深めることができるようにする。

(3) 展開(略)

(4) 評価

ひとりよがりな解釈する二人の紳士の思いの滑稽さを読み取ることができたか。

5 本時の計画(6/10時間)

(1) ねらい

注文が自分たちにされていたことに気付いた二人の紳士の動揺ぶりを読み取ることができるようにする。

(2) 展開の構想

「すると」で始まる場面である。何か言動を起こしたことに対応する結末や結果が表れることを示唆する言葉である。この言葉通り、二人の紳士の心情が180度転換する。つまり、注文が自分たちへなされていたということに気付いて意気揚々としていた気持ちが一気に奈落の底に落とされるのである。この逆転を朗読で読み味わわせたい。また、読みの深まりを自覚させるために、一読後の気付きと読後の気付きを文章化させて比較させる。

① 下位の児童に指名読みをさせて正確に文章を読むことができるようにする。

場面読みが進んできているのでかなり下位の児童も読みには抵抗をなくしてきている。ここで、正しく読ませることで読みへの自信を持たせていきたい。(家庭音読カード等で自主練習を奨励しておく)

② 三つの注文に対応する紳士の言動の変化を、それぞれ朗読で表すことで、「二人は泣きだしました。」にいたる過程の心情の変化を想像することができるようにする。

ここでの注文は次の三つであり、注文は最後となる。

1… [11料理はもうすぐできます。十五分とお待たせはいたしません。すぐ食べられます。早くあなたの頭のびんの中のこう水をよくふりかけてください。]

2… [12いろいろ注文が多くうるさかったでしょう。お気の毒でした。もうこれだけです。どうか、体じゅうに、つぼの中の塩をたくさんよくもみこんでください。]

3… [13いや、わざわざご苦労です。たいへんけっこうにできました。さあさあ、おなかにお入りください。]

中位の児童に、それぞれの注文に反応する紳士の様子がよく表れる朗読を心掛けさせて、その朗読から紳士のうろたえる心情を想像させて発表させる。聞き手の児童には「もうものが言えない」ふたりの心中をありうるだけすべて述べさせる。その際には、朗読上特に「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」「にげ……」や「うわあ。」の表現の仕方を工夫させるようにしたい。

③ 上位の児童の朗読により内容理解を深めさせることができるようにする。

様子が目に見えるように読む工夫をさせる。

(3) 展開(略)

(4) 評価

朗読の工夫を通して、二人の紳士の動揺ぶりを想像することができたか。

5 本時の計画（7／10時間）

(1) ねらい

二人の山猫の子分の言動から、山猫の親分の性格や考え方を読み取り、それに反応する二人の紳士の狼狽ぶりを読み取ることができるようにする。

(2) 展開の構想

やはりこの場面も「すると」で始まる。前の場面で起きたことに対する結果が描写されている。注文されていたことに気付いた二人の紳士に対しての山猫の子分のぼやきと誘いである。これがまた、結果的には二人に強烈なインパクトを与えることになっている。同時に山猫の親分と二人の紳士の共通項をも浮き彫りにしている。山猫の子分の会話に焦点を当てて読みを深めさせたい。ここでも同様に初めの気付きと読後の気付きの文章化を図る。

① 交互読みの正しい読みによって山猫の子分の会話文の読みを意識することができる。

全員の児童を参加させた交互読みを2回繰り返すことで、正しい読みを定着させる。

② 顔がまるでくしゃくしゃの紙くずになったときの紳士の気持ちにスポットを当てて、なぜそうなったのかを山猫の会話文を比較読みをして考えることができる。

ここでは、山猫の子分の会話文から、次の二つのことを考えさせたい。

[1] … 山猫の親分の考え方・性格と二人の紳士との共通性

[2] … 聞いて、うろたえる二人の紳士の心情

二人の紳士の胸には次々にぐさぐさっと突き刺さる山猫の子分のやりとり・誘いを、二役（山猫の子分A・B）に分かれての役割読みをするとともに「二人は、泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。」を強弱の観点読みを工夫させて、絶体絶命の二人の心境・心情を想像させる。その際には前者において、朗読的役割読みと棒読みの役割読みをさせて、その比較検討から違いについて発表させる。さらに、地の文を含めた役割読みをすることで、二人の心情を理解させる。後者ではどの「泣いて」を強めるかに視点を置いて考えさせる。

この後、どんな結末を迎えるのか続き文を想像して書かせる。

③ 中位の児童の一人読みで内容理解を深めることができるようにする。

いく人かの中位の児童に本場面を朗読させて内容理解を深めさせるとともに、朗読の楽しさを感じさせる。

(3) 展 開（略）

(4) 評 価

○ 二人の山猫の子分の言葉から、山猫の親分の性格や考え方を読み取ることができたか。

○ 二人の山猫の子分の会話から、二人の紳士の大変な狼狽ぶりを読み取ることができたか。

5 本時の計画(8/10時間)

(1) ねらい

助けられたときの言動から、少しも改心していない二人の紳士の心情を読み取ることができるようにする。

(2) 展開の構想

幻想の世界が消滅する場面である。しかし、夢として総てが消えるのではない。物体は消え去ったが、二人の紳士への警告・仕打ちは「さっきいっぺん紙くずのようになった二人の顔だけは～もう元のとおりになおりませんでした。」と続いている。読み深めればかなり恐怖感の漂う内容である。しかし、作者宮沢賢治は、注文の内容や山猫の会話文などにユーモアを交えているので、決して怖くはならない。ここでは主題とも関わるが、「何故、紙くずみたいな顔が直らなかったのか」に焦点を置いて二人の言動からそれを考えさせていきたい。

① 指名読みと一斉読みを繰り返して正しい読みを定着することができるようにする。

最後の場面であるので、どの子供にも正確な読みをさせなければならない。ここにいたっては読みの観点(ア)(イ)(ウ)はすべてクリアーさせる。

② 助けられた二人の心境を言動の比較読みを通してとらえさせることができるようにする。

この最終場面は次の二つに分けられる。

[1] … そのとき、後ろからいきなり、～木はゴトンゴトンと鳴りました。

[2] … 犬がフーとうなってもどってきました。～もう元のとおりになおりませんでした。

[1] では、状況が変化したことを押さえる程度にして、「風がどうとふいてきて、草はザワザワ、木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。」を丁寧に扱う。ここで、幻想の世界が出口になっていることを把握させるために、音読の工夫を思い起こさせ、朗読させて、場面を想像させる。

[2] では、「おうい、おうい、ここだぞ、早く来い。」の読みの検討と山鳥を買ったことを取り上げ、紙くずのようになった顔がもう元にもどらなかったことのわけを考えさせる。

[1] と [2] を踏まえてから、主題の追求をする。観点として登場人物の象徴性を取り上げる。特に二人の紳士は一体何を意味するのかを考えさせたい。

③ 下位の児童の一人読みで内容理解を確かに行うことができるようにする。

「聞き手によく味わえるように」という観点を与えて朗読させる。「味わい読み」は意識させて読ませて“できる”という喜びを与え、次の学習につなげたい。

(3) 展開(略)

(4) 評価

二人の紳士の改心していない心情を把握することができたか。

5 本時の計画（9／10時間）

(1) ねらい

- ・聞き手にも内容がよく味わえるように朗読することができるようにする。
- ・「注文の多い料理店」の内容理解を深めることができるようにする。

(2) 展開の構想

理解したことをさらに深めるには朗読が最適と考える。

今まで各場面をピックアップしながら読み取りを進めてきていて、内容は把握できているが、読み自体を全体の流れとして体感することはできていない。つまり作品の主題を把握するところまでは全員の児童はいたっていないし、作品全体の読みを通してのよさに浸る読みは経験していない。

文学作品の読み取りの指導は読書力へと発展する読みを意識して行うことが望まれている。読書の魅力は、作品世界に浸る中で感動や新しい発見が生まれる醍醐味が味わえるところにあるが、この経験を積ませることが確かな読書力の育成に結びついていくものと考ええる。

学級での作品読み（単元授業）は、一人読書とは異なり、一斉に一つの作品読みをしてきているだけに、文章の正確な理解の上に立って、各々が個々の読みの世界を築いてきている。それだけに、その読みの世界を朗読という手法で表現することで、各々の読みの世界を、さらに深化・拡充させていきたいのである。ゆえに、これを助ける働きを有する効果的な手法として、文章の流れを体感しながら読み味わうことのできる“朗読”の活用を図りたいと考える。

ところで、文学的文章、作品には“生きること”がテーマとして取り上げられているケースが多いが、本作品は、「人間と自然の融合」がテーマでもあるので6年生なりに朗読に親しむ中でとらえさせていきたいと思う。

具体的には7人のグループを編成し、各場面ごと（7場面）に朗読リレーをさせて、場面読みの朗読力を高めてから、一人による朗読を下位・中位・上位の児童の抽出児に読ませて、作品の読み味わいを楽しませたい。なお、聞き手には簡単な感想を書いて、述べてもらうこととする。読み手と聞き手の融合を期待したい。

ここではどちらかというと、聞き手の耳を耕すことも指導の意図として強く持っていたい。音声言語は話す・聞く、読む・聞くという相互関連の機能を有しているからである。一方の能力だけを伸ばすのでは片手落ちである。両方の能力を高める配慮は常にしていきたい。

(3) 展 開（略）

(4) 評 価

- ・聞き手を意識して、よく味わえる朗読をすることができたか。
- ・内容理解を深めることができたか。

5 本時の計画(10/10時間)

(1) ねらい

作者の考え方について、書くことで自分なりの考えを確かに持つことができるようにする。

(2) 展開の構想

本单元では一貫して音読・朗読という手法の活用を図って読み取りを進めてきているが、1時間1時間の指導の中でも、また、単元の指導のまとめの段階でも、考えを整理したりまとめたりする働きを有する「書くこと」を重視して取り入れてきている。これは、読み取りを収束するために有効である。また、形成的・総括的評価の資料としても働きを有する。

感想の書かせ方にはいくつかのパターンがあるが、ここでは、400字の中に作者の思想・考えについて自分なりの考えを書かせる(説明5分)。また、この単元で学んだことをも付加させることとする。

予定時間内(30分)に書き終えた子供には、宮沢賢治の他の作品を紹介し、読書を推奨する。後半の10分間には感想文の発表会を行う。

すべての子供に発表させることができないので、原稿は印刷し、『注文の多い料理店』を読んで」というタイトルで学級文集にすることで、友達の考え方にふれさせ、思考の深まりを期待することとした。なお、時間外に作文をふくらませることに関しては大いに奨励することとする。

内容としては次のようなことが2点ないし3点おさえられていればよしとする。

- 二人の若い紳士の話し言葉について自分なりの印象を書いている。
- 二人の若い紳士の行動について自分なりの印象を書いている。
- 登場人物の思いや考え、行動から自分だったらどうするかを考えを書いている。
- 物語の構成・展開のおもしろさに興味・関心を寄せている。
- 自然と人間の関わりに注目し、自然の大切さに思いを寄せている。
- 人間のもつ善と悪の本性両面について考察している。
- 作者へのメッセージとして希望や要求を書いている。

基本的には本作品に接し、理解力を高め、学習を通して自分なりの在り方や考え方を深めて、“自己実現”を図ることができることを望みたい。

本单元終了後には、宮沢賢治の作品はもちろんのこと、6年生に読ませたい著名な作者の文学作品を手軽に読むことのできる学級経営づくりに心掛けていきたい。

小学校の国語科指導で育てたい力は他でもない、“生きて働くことばの力”すなわち『言語の能力』である。教材を活用して、子供たちが日常の生活の中で、ことばを使って考えたり、ことばを使って自分や人を生かしたりすることにつながる基礎・基本の能力を育てることにある。中学校への橋渡しとしても第6学年の指導は特に留意したいことである。このことが、国語を尊重する態度形成へとつながっていくことと考えている。

(3) 展開(略)

(4) 評価

作者の考え方について自分なりに考えをまとめることができたか。

6 授業の実際と考察

(1) 授業記録と考察(2/10時間)

| 授 業 記 録 | 考 察 |
|--|--|
| <p>T 1 1の場面を読んでもみますから、分からないところをチェックして、後から質問して下さい。 「二人の若いしんしが、～いっこう見当がつかなくなっていました。」までを音読する。</p> <p>C 1 聞きながら本文が印刷されている文にチェックする。</p> <p>T 2 発音、アクセント、句読点、言葉の意味を考えながら音読しました。この読みを「正しい読み」と言います。 きみたちは、5年生より、人に聞かせる音読、すなわち朗読をしてきていると思いますが、この読みは上手な朗読にいたるまでの一つの段階ですから、大切にしたい読みなのです。 さて、今の読みで、分からないところはありませんでしたか。</p> <p>C 2 痛快</p> <p>T 3 気持ちよく愉快だろうね。「快」は心地よいという意味ですから言葉どおりに訳せば、痛いほど気持ちよいということです。</p> <p>C 4 めまい</p> <p>T 4 目がまわって意識を失いそうになることです。ふっと自分が分からなくなる瞬間です。</p> <p>C 5 損害</p> <p>T 5 思いもかけない事故などによって物などがなくなったりこわれたりして、お金などがいるようになります。 ここで付け足しておきます。2,400円というのは、今現在の2,400円ではありません。山鳥が10円で何羽か買うことのできる時代ですから注意してください。 それでは読んで下さい。発音、アクセント、間に気を付けて読んで下さい。</p> <p>C 6 音読する。</p> <p>T 6 初めてですからつかえたり読み間違えたりしても、これからどんどん上手になりますから心配しなくてもいいのです。</p> <p>T 7 一人一人微音読をしてください。(微音読について板書しながら) わずかな声で、自分に聞こえるくらいに読みましょう。</p> <p>C 7 微音読をする。</p> <p>T 8 一斉読みをしましょう。</p> <p>C 8 一斉読みをする。(声量は全体的に少ないが「正しい読み」の観点を押さえた読みができています。)</p> | <p>ここでの読みは読み手の意図や感性は文字に表出しないようにした。この点では味けのない読みかも知れない。しかし、発音、アクセント、間といった正しい読みのポイントをきちんと聞き手の耳に入れることは読みの出発点と考えるので、初めの音読にはたとえ6年レベルでも大切にしたい。</p> <p>それで、T2のような説明を添えることとした。初めからへんな読みぐせをつけないためにも是非とも取り入れたい音読である。</p> <p>初めに全文を与えて予備的に読解の所期段階である言葉のおさえがなされていれば必要のないことには違いないが、ここにおいての初読だけに意味不明な語句についてQandAの形式で進めた。</p> <p>なお、今現在の金銭感覚では2,400円といえばそう大金というイメージはもたない。しかし、この時代ゆえに山鳥が10円ほどで何羽か買えるということをおさえることとした。</p> <p>ポイントは前述の発音、アクセント、間とし、読ませた。初めということで緊張感があったのか、やや誤読が目立った。C6には、T6のように助言はしたが、微音読等で声を出すことをあらかじめ行うことがリラックスを生み、また、読み慣れにつながって効果をあげることになると考える、したがって、初めから微音読タイムをセットしておくことが望ましいのではないかと。</p> <p>ただし、ここでの意図は、初読でどの程度の音読力を持っているのか知り、今後の指導に生かしていこうとすることであつたので、中位児童の実態把握</p> |

T9 ありがとう。発音やアクセント、間に気を付けた読みができています。

ここで、はっきりさせておきたいことがあります。それは、いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どうしたかということです。(5W1Hを板書する)

本文にチェックしましょう。

C9 一つ一つチェックしていく。

T10 チェックしたところを意識して強めて読んでみてください。

C10 5W1Hに気を付けた音読をする。

T11 いつですか。4択です。春の頃だと言う人?

C11 挙手なし

T12 夏だと言う人?

C12 挙手なし

T13 秋だと言う人?

C13 16人ほど挙手する。

T14 冬だと言う人?

C14 4人ほど挙手する。

T15 さていつなのでしょう。それが表れている言葉や文がありますから探して指で押さえない。

C15 押さえる。

T16 挙手をした人に聞いてみましょう。

C16 3行目に「木の葉のかさかさしたところ」とあるので落ち葉は秋ではないかと思いました。

T17 とてもよいところに目がいききましたね。冬と思った人がいましたがどうですか。

C17 同じです。落ち葉の状態ですから、もう冬に入っていると思いました。

T18 だれが登場してきましたか。

C18 二人の若いしんし

C19 白くまのような犬

C20 案内してきた専門の鉄ぼううち

T19 どこですか。

C21 だいぶ山おくで木の葉のかさかさしたところ。

T20 それで、二人の若いしんしはどうしたんですか。

C22 道にまよってどういけばいいのか見当がつかなくなりました。

T21 事実の把握ができましたから、次にどういう人物か考えてみましょう。手掛かりとしてどの文に注目したらよいでしょうか。

C23 会話文

T22 だれの「」文か、A、Bの印を付けてください。

C24 A1~A4, B1~B4まで印を付ける。

T23 どんな性格が表れているか「」文を気を付けて読んでみてください。

C25 各自声を出して音読する。

T24 初めに最初の二人の会話を取り上げてみましょう。それぞれの言葉の中で一番言いたいことは何か。そこを思い切って強めて読んでみたいと思います。一

につながることはできた。

微音読の一斉読みでは先程の指名読みでつかえや誤読の箇所には十分注意した「正しい音読」ができていた。ただし、これで評価はできない。なぜならば、追読傾向の児童や、口は開けてはいるが、声量を落として音読している児童が4~5人いたからである。

5W1Hのおさえは、物語の読みにおいて人物や事実把握の上で必ず押さえておくことが大切と考えを行った。

「いつ」の把握では、実際に本文に明示されていないので、T11~T14のように問うていった。児童は叙述に目を向けて、「秋、もしくは初冬」ともらえてくれた。

「木の葉のかさかさしたところ」とあれば、イメージとして、「落ち葉」や「枯れ葉」が思い浮かぶ。これに、「ぼくもちょっと寒くなったし」を結びつけると「春」「夏」ではないという消去法で回答が導き出される。

このようにヒントがいくつか叙述の中にある場合はそれに関連させて、想像から思考という働きが行われる。ゆえに、発問としては、効果を生む内容と言える。

残念ながら児童の発言には「木の葉のかさかさ」と「寒くなったし」とを結び付けた発表はなかったが追求させるとおもしろいと思う。

登場人物は、C18C19C20の発言にあるように、三者を挙げた。しかし、ここでは、「二人の若いしんし」のみ取り上げたが、重要人物はだれかを、文章の中から判断させる方向に持っていくことも、読解を深めることになるのではないと思われる。

場所でも同様である。単に「だいぶ山おくの…」でおさえたが、実際は「だいぶの山おくでした。案内してきた専門の鉄ぼううちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい山おく」という叙述にも目を向けさせて、どんな「山おく」なのか深くイメージさせることが大切であった。

人物把握の手掛かりとして会話文に注目させた。これを発端にしては、服装(身なり)、行動等にも目をむけさせようとしたが、実際は会話文に時間をかけたためにそれだけに止まってしまう。

確かに音読で、強弱や抑揚等を付けて会話文を読むと、その人なりの思いや考えが想像できることにつながるが、これはあくまでも一つの方法であるから、他の叙述に目が向かないとすれば、どうした

- っだけ選んでください。
- C26 各自声に出しながら検討する。
- T25 発表して下さい。理由を後で聞きます。
はじめにA1を。
- C27 「何でも構わないから」の「何」を強めて読む。
- C28 「何でも構わないから」をきばったように読む。
- C29 「早く、タンタアーン」と大きな声で読む。
- C30 「けしからんね」を強めて読む。
- C31 「ここの山はけしからんね」「こころ」と「けしからんね」を強めて読む。
- C32 「ぜんたい、ここの山はけしからんね」の文全体を強めて読む。
- T26 次はB1です。
- C33 「ずいぶん痛快」を強めて読む。
- C34 「ずいぶん痛快だろうね」を強めて読む。
- C35 「しかの黄色な横っ腹なんぞに」を強めて読む。
- C36 「どたっと」を強めて読む。
- T27 みなさんが数多く取り上げた言葉や文に着目してそこに十分に気を付けて音読してみてください。
- C37 会話を発表内容に注意しながら音読する。
- T28 しんしたちの気持ちや性格がつかめてきたようですね。考えられることすべてあげて下さい。
- C38 ざんこくだ。
- C39 気が短い。
- C40 自分勝手にひとりよがり。
- C41 空想好き。
- T29 地の文や他の「」文などにも目を向けて想像してみてください。例えば「すっかりイギリスの兵隊の形をして」というような文から。
- C43 自慢こき
- C44 見栄っ張り
- C45 金持ち
- C46 金持ちでもありけちでもある。
- T30 1場面を聞き手に分かるように朗読して下さい。
- C47 朗読する。
- T31 読後の感想を分かったことを中心に書いて下さい。手掛かり語も加えて下さい。

らよいか考えなければならない。

さて、音読の工夫の実際について、「会話文の中で一番言いたいことは何か」と投げ掛けた。

A1(初めのしんし)に対しては、C27～C32、B1(次に話したしんし)に対しては、C33～C36のような反応を示した。

ここで、児童の考えを集約するか否かであるが、ここでは追求することは避けた。なぜなら、いずれの回答にもA1のしんしの思いや考え、性格が表出されているからである。「ひとつだけ」と限定しても様々な考えが出されるのであるから、総合的にとらえた方が自然だと判断したからである。B1においても同様である。

T28の発問に対するC38～C41の発言はそれを物語っている。

「確かな読み」における音読の工夫は内容理解を目標にした手段であるだけに技法に走ったり、集約したりすることはしないようにしたい。個の考えを尊重する意味でも一人一人のイメージ化・発想は大切にしたいと考える。

ここで、地の文にも目を向けさせたわけだが、できれば児童が気付くように働き掛けることが望ましい。しかしながら、今日、本時で接した文章だけに無理といえるかも知れない。

C43～C46の発表のように回答を引き出すことはできたが、やはり、発問として実際の言葉や文をあげるのではなく、ヒントとなる言葉、例えば「服装や言葉づかいで気の付いたことはないか」と問うことも考えられる。

朗読は本時の学習のまとめと明日への読みの意識化として行ったが、中位の児童ではあったが、リズム・ポーズ、アクセント、プロミネンス、そして、イントネーションに気を付けた朗読をしていた。

(2) 児童の変容(感想文より)

代表的な感想を挙げてみる。

ア I・H①…初発では「題名とお話がどうつながっていくのかわからないけれど、次を読みたいと思います。」と記し、読後では「この二人の若いしんしはとてもかりが好きそう。しかし、自分勝手だ。えものがでてこないからといってとてもおこっている。かりをするならもっと気長にしないでいい。」と綴っている。手掛かり語としては、「何でも構わないから早くタンタアーンとやってみたいもん

だあ」にしている。これは素直な感想といえよう。

イ T・H①…初めの感想には何も書いてない。読後には「この二人はざんこくだし、自分のことしか考えない。それに見栄っ張りだ。おそらく、この二人は一人だともできないのかも知れない。ふたりだから大きなことを言っているのだろう。」と述べている。それに手掛かり語として「すっかりイギリスの兵隊の形をして」を挙げている。

ウ H・T (C児) …「最初に読んだ感じでは、犬をなくし、道に迷ったイギリスの兵隊二人をかわいそうに思った。でも読み終えてからはお金にけちで、自分勝手。それに外見だけを気にするにせものの兵隊だということが分かって残念に思った。」と読み取りの変容を表している。

エ R・O①…「二人のしんしは、すっかりイギリスの形をしているんだけど、外見はイギリスのかっこうで、中身はちがうからおもしろい。」と内容のおもしろさに気付いている。

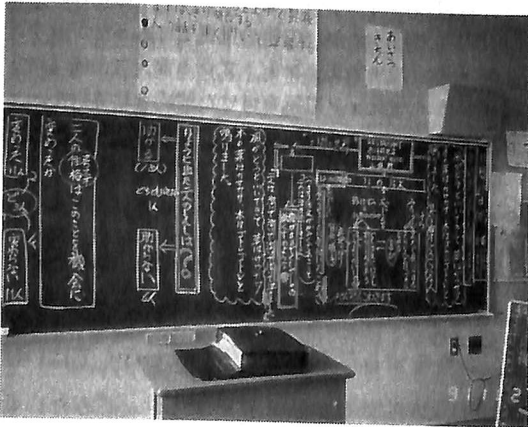
オ S・I…「二人のしんしは自分勝手にむかつく。犬が死んでしまっても少しも悲しがらないのはとてもざんこくだ。」と書き、手掛かり語として「実にぼくは二千四百円の損害だ」「ぼくは二千八百円の損害だ」を挙げている。

カ S・I…初めの感想には「道に迷って困ってしまった理由が分かりません」と書き、読後には「二人の若いしんしはらんぼうで動物が死んでも何と思わないから、それで道に迷ったのではないかと思います。」と述べている。またその手掛かりとして、「しんし A・B の会話から」と記している。

他の感想文においても①～⑥にあるような感想が書かれている。この場面では、二人のしんしの気持ちや性格が上記のようにおさえられていれば読み取りができたと判断したい。本時で特に取り上げた会話文を手がかりとして感想を綴っている⑥のケースをみるに、音読で検討したことは効果的であったと言える。

5 授業の実際と考察

(1) 授業記録と考察 (7 / 10 時間)

| 授 業 記 録 | 考 察 |
|--|--|
| <p>T 1 図-1 について説明する。</p>  | <p>図-1 は事前に板書しておき、本時の初めに今までの事の成り行きをしっかりと把握させる意図で、説明をすることとした。</p> <p>また、このことは、次の読みへの期待感を生み、物語を読みたいという望みの倍加につながる事ができた。</p> <p>毎時間、セッティングする必要はないと思うが、物語文の読みの節目節目には、要点をおさえる意味においても5分くらいの時間で簡略にまとめることはあってもよいと考える。</p> |

－ 2 の⑤場面の読み－

- T 2 さて、この二人は助かるのでしょうか。
- C 1 助かる …18人
- C 2 助からない …6人
- C 3 どちらともいえない…1人
- T (プリントを配布する)
- T 3 どうなかったか聞き手に分かるように読みましょう。
- C 4 本文を朗読する。
- T 4 初めての読みなのに大変上手に読むことができました。みんなで、一斉読みをしてみましょう。
- C 5 一斉読みをする。
- T 5 二人の様子がよく表れているところを見付けて下さい。見付けたら四角でくくって下さい。1つ見付けた人は二つ・三つあるかもしれませんから、探してみして下さい。
- C 6 作業
- T 6 発表して下さい。
- C 7 二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのようになる。
- C 8 顔を見合わせ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。
- C 9 二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。
- T 7 表情が表れているのはどこですか。
- C 8 顔がまるでくしゃくしゃの紙くずのように。
- C 9 泣いて泣いて泣いて泣いて
- T 8 ①「泣いて泣いて泣いて泣いて」(四つの「泣いて」は同一のアクセントで読む)
- ②「泣いて泣いて泣いて泣いて」(しだいにアクセントを強めながら読む)
- さて、感じはどうですか。
- C 10 ①の場合はふつうの感じがする。
- C 11 ②の方では、二人の気持ちがだんだんこわさを増していく様子がよく伝わってくる。

－ 3 の場面（最後）の読み－

- T 9 (本文のプリント「そのとき～木はゴトンゴトンと鳴りました」までを配布しながら)プリントがわたりましたら、微音読をして下さい。
- T 10 ではC12君読んで下さい。同じところをC13さんも読んで下さい。
- C 12 指名読み(朗読)
- C 13 指名読み(朗読)
- T 11 二人ともに場面の様子がよく分かる上手な読みをしてくれました。特に、間の取り方がうまいです。どうやら現実の世界にもどったようです。
- いよいよ最後の場面になりました。(「犬がフーとうなって～もう元のおりになおりませんでした」までのプリントをわたす)紙くずのような顔はもと

はじめにT2のように投げ掛けた。これは児童の予想を図るためである。「助かる」と思った児童は肯定的な見方で読み進めるであろうし、「助からない」と思った児童は否定的な見方で読み進めるであろう。また、「どちらともいえない」と思った児童はどっちつかずのあるいは平衡的な見方で読み進めるであろう。実際、このことは、授業の最後で扱う「人柄が『変わった』『変わらない』」の選択につながっていく。

音読の形態は思い切って表現読みにアタックさせてみた。本来、音読・朗読指導ステップにおいては「正しい読み」「確かな読み」「豊かな読み」と順次つないでいくわけであるが、ここまで、読み進めてきているし、6年レベルであるので、聞き手によく内容が伝わる・分かる・味わえる読みの工夫に取り組ませたのである。

つまり、「豊かな読み」から内容理解をしようと試みたわけである。

T8では「泣いて泣いて泣いて泣いて」を取り上げた。これは、二人のしんしのひどく嘆き悲しむ様子を認識してほしいという願いからである。

児童は②の読みでは笑った。確かに読みとしては不自然であり、デフォルメにはちがいない。けれども、段々強くしていくことで、ひどく気持ちが落ち込んでいくことを実感としてとらえてほしかったからである。

実際にC11のように「泣いて」が4回繰り返されていることから「だんだん」と「こわさ」を結び付けている。

ここにおいても指名読みは上位の児童二人に読ませた。一人は「助かる派」一方は「助からない派」である。二人はさすがに読み込んでいるだけあって初読にもかかわらず、聞き手に内容が伝わる、味わいのある読みを表現してくれた。特に「」文の鳴き声はみごとであった。それに「風がどうとふいてきて、草はザワザワ木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。」は幻想の世界から現実の世界への橋渡しとして様子がよくわかるようにイントネーションを付けて表現していた。

- にもどったでしょうか。微音読をして下さい。
- T12 読んで下さい。
- C14 指名読み(朗読)
- T13 間の取り方やイントネーションの付け方が上手でした。もう一人読んでください。
- C15 丁寧に指名読みする。
- T14 今一度考えてみたいことがあります。それは「しんし」ということです。しんしは上品で教養があり、思いやりの深い人のことでした。この二人はしんしと言えるかな。どうでしょう。
- C16 言えない。思いやりはまったくない。
- C17 上品ではない。みっともない。
- C18 ばかされていることに気付かなかった。よくばかりだ。
- T15 こんな怖い目にあった二人はこの後人柄が変わったでしょうか。語句や文を根拠にしてよく考えてみて下さい。
- C19 作業
- T16 聞いてみます。
- C20 変わった ……11人
- C21 変わらない ……11人
- C22 どちらともいえない…3人
- T17 変わったと思う人は理由を言って下さい。
- C23 「紙くずのようになった二人の顔はもう元のとおりになおりませんでした」と最後にあるので、後遺症として完全に残っていて、忘れないと思う。
- C24 顔をみて、二人は反省したのではないか。
- C25 とてもこわい目にあったから、自分勝手という性格はなくなったと思う。
- C26 「しかし」とあるから、もうこりごりと心は変わったけれど顔は変わらない。
- C27 きっと、もうこんな怖い目にあいたくないと思ったにちがいない。
- C28 「やっと安心しました」とあるから、これからはこういう怖い目にあいたくないと思ったろうと思う。
- C29 変わってほしいと思います。
- T18 変わらないと思った人はどうですか。
- C30 「とちゅうで十円だけ山鳥を買って」とある。生きものを殺したのを買っていくから、変わっていません。
- C31 「安心」というのは、初めのときの気持ちにもどったということであって、少しも変わってはいない。
- C32 「二人はやっと安心しました」ということだから性格は変わっていない。
- C33 「早くこい」という言い方をしているから、変わっていない。
- C34 やはり「山鳥を買って」とあるから生き物を大切にしていない。
- C35 反省はしていないと思う。紙くずのような顔になっ

こは、朗読だけで、内容の読み取りは素通りした。

ここでの指名読みは中位の児童であったが、読みたいという意向がやはり読みを上手にすることにつながっていった。イントネーションの付け方が上手であり、味わいのある読みをしていた。

ここで「しんし」という意味を確認したのは、二人はもはや(はじめからであるが)姿・形、心ともにしんしとはいえないということをおさえさせたからである。それに、この場面では「しんし」という言葉は削除されている。

「変わったか、変わらなかったか。」の問いは叙述に目を向ける発問である。児童は考えの根拠として語句や文に目を向ける。

「変わった」も「変わらない」も11人と半分に分かれた。

こはやはり「変わらない」が作者の思想の深さを示すものであるが、どちらが正解などという結論に結び付けるようなことはしない。

「変わった」と思った児童はそれなりに人間更生に思いを込めているのであって読み取りが浅いとは判断したくない。内容理解はそれなりにしているからである。この後、朗読発表会や読後の感想文発表等で自らの考えがゆらぐこともあるからである。

また、もしかして、この事件を機に10年後くらいに改心して、善良な人間になるかも知れないのである。

それに、紙くずのような顔はそのままでもC23～C29にあるように「もう怖い目にはあいたくない」という気持ちが改心につながっていくことは考えられる。また、読み手としてはそう考えたいのである。C29は児童の素直な訴えにちがいない。

「変わらない」と考えた児童はC30～C37にあるようにそれぞれが、単に漠然とではなく叙述に根拠をおいて、自分なりに考えを述べている。

言葉づかい、山鳥の購入、そして、紙くずのような顔は元にもどらないということ等に目を付けている。しっかりと読み取っている姿が伺える。

- てなおらないのだから、二人の性格は変わっていない。
- C36 再び元気になってらんぼうな言葉づかいをしているから変わらない。
- C37 なまいきだ。元気になったらすぐに「早く来い」といっている。
- T19 「どちらともいえない」と回答した人は今の友だちの考えを聞いてどちらかに考えが動きましたか。
- C38 「早く、来い」という言葉づかいはらんぼうだから変わらないように思います。
- T20 他に考えが変わった人？
- C39 はじめは、変わったと思ったのですが、「早く、来い」という言葉づかいはらんぼうですし、安心してもしゃくしゃの顔がもどらないのだから、二人の性格は変わらないんじゃないかと思えます。
- T21 次の時間は全文通しての朗読発表会をしましょう。それでは次のワークをして下さい。
- C40 作業。

ここで、意見がゆれた児童がいる。すなわちこれは、級友の意見や考えを聞いて自分の考えを思いなおした成果と思える。



(2)児童の変容(感想文から)

ア T・I (B児) …「二人のしんしはとても怖い目にあったのに改心していないから悪い人たちだと思いました。また、犬が助けてくれたにもかかわらず、ぜんぜんお礼とか感謝の言葉を言わないのはおかしいです。自分たちの行動の意味に気付かない自己中心の考え方は今後も変わらないことでしょう。」と本文の読後の感想としてまとめている。冷静で客観的な見方・とらえかたをしている。

イ Y・H (F児) …今日でやっと注文の多い料理店の結果が分かりました。何だかこの物語の題は「こわい料理店」の方がにあっているように思えます。最後まで読んで特に感じたことは、二人はいいかげんな心であるから最後の最後にも結局バツゲームを与えられているという感じを持ちました。

ウ I・H②…二人にはばちが当たったように思えます、どうしてかということ、今まで自分勝手にぞんこくで、みえっぱりだから、このようなことを機会に心を入れ替えたらどうですか。という意味を持ったお話だと思いました。おそらく、きちんと心が変わったらあのくちゃくちゃな顔ももとにもどるんじゃないかな？

エ T・H②…「とにかく『紙くずみたいにくしゃくしゃになった顔』という表現がいい。二人にびったりだと思う。たぶん、変わらないでしょうこの顔も心も。そう思います。」

オ K・K…「私はまだいくつか疑問が残っています。それは、死んだはずの犬がなぜ生きていたのか。東京にもどったふたりのしんしは性格が変わってよくなったかどうか。まだよく分からないのです。」

カ R・O②…「ふたりのしんしはここでやっと自分たちが食べられるんだということに気付いてふるえだした。ここがおもしろい。でもふたりのしんしはこのことでこりごりになって性格は変えたのではないかと思います。」

授業では「変わらない」と答えていた児童が感想では「変わった」と変化を見せていた児童が半数ほどいた。おそらく友だちの意見交換で思い直してみたと思える。ただし、⑥の感想文にある読み取りに対しても児童の願いとして受け取りたいと考える。

7 研究のまとめ

(1) 児童の変容 (P73掲載児童)

ア 感想文から

A 児童〈上位レベル〉

この物語を振り返ってみると、この中に登場する自分勝手な二人のしんしは、料理店の注文に対して自分たちで勝手に考えて、最後はあやうく食べられかけるのですが、一体どうしてこんなことになってしまったか考えてみたいと思います。

一つは、しんしたちの性格ではないかと思います。自分勝手、おたかぶり、みえっぱりなどが招いた結果なのじゃないではないかということです。

二つには、注文に対してなんでも受け入れてしまうおろかさです。

三つには、自然をなんとも思わないごうまんな態度です。

作者の宮沢賢治さんは二人のしんしを登場させてこれらのおろかさを忠告しているのではないかと思います。顔がもとにもどらなかったのは、おそらくぼくたちの中にある悪い心にも警告しているのではないかなと思いました。

本児はこのような簡潔にまとめている。作者の主張・考えを推測しての感想であるが的確にとらえているのではないと思う。6年生のレベルとしては主題にせまる深い読み取りをしていた児童の一人である。次に自然破壊と人間を結び付けた感想を取り上げる。

B 児〈上位レベル〉

以前、この作品を読んだときにはあまり意味が分からなかったのですが、今回、もう一度ゆっくり読み直して考えてみると、作者は何かとても大切なことをうたえているように思いました。それは、「人間と自然との関係」ということです。

二人のしんしは自然をめちゃくちゃにしてしまう悪い人たちです。自分たちのしていることが悪いことだとは気付いてなくてむしろ、楽しんでいるのはなんだかあわれにも思います。それに、そのことが原因でこわい目にあっているのにぜんぜん反省していません。ここを読むと私はとても悲しくなります。確かに私たちは生活していく上で、自然をこわしていることは事実です。はたして、どれだけの人がそのことに気付いているのでしょうか。

前に父から聞いた話ですが、A山で父が標本を作るために、ギフチョウというめずらしいチョウを取りに行ったとき、東京の人たちのグループもたまたまギフチョウを取りにきていて、まったくギフチョウが取れないと言っていたので、採集のポイントを教えてあげたそうです。ところが、その人たちはギフチョウをすべて採集してしまっ、もうそこには一匹もいなくなってしまったということです。この話をきいて、二人のしんしとそっくりだなと思いました。実際、ギフチョウの名の起こりの岐阜県では絶滅しているそうです。

私は再びこの物語に接して、自然をこわす人たちはなくなっても知れないけれど、私たちは努力して互いが自然とともに守り合う・支え合うことを進めていくことが大切だと強く感じました。

地球上の人々がもっと自然に目を向けて上手につきあえば、一人ひとりの心はあたたかくなり、きっと本当の人間が見えてくると思います。

本作品は、自然と人間との共存共栄についてポイントを当て、大変良くまとめている。ギフチョウという身近な話題とからめて自然を見つめること、大切に思うことの重要性について述べている。最後の2行には本児の純粋な願いが結集されている。主題の読み取りとともに自分をも成長させているケースといえよう。

C児〈上・中位レベル〉

私は今までにいろいろな本を読んできましたが、こんなにむずかしい本を読んだのはたぶんこれが初めてだと思います。

この物語は不思議な世界を書いています。おそらく想像であり現実にはありえないことだと思います。でも、誰もが思ったりすることが書かれているようにも思います。よくがあったり、自分勝手だったりというのはだれの心の中にもあることだと思うからです。

それに、この物語は他の話とちがって読み深めをしないときっとだれにも深い意味は分からないのではないかなと思います。それだけむずかしいということです。

賢治さんは、自然を愛する人だと聞きました。私も自然を愛し、自然と共存して生きていきたいと思っています。私の生まれは佐渡です。佐渡はどこにも自然が生きています。私はずっと佐渡で暮らしていたら今よりも自然への気持ちが強かったと思います。賢治さんはきっと豊かな自然に恵まれたところに育ったのでしょう。だからこそ、物語の中で自然をこわそうとする人間をこらしめたのかも知れません。私は一度童話を書こうと試みたことがあります。でも5行でストップしてしまいました。

私は、賢治さんがうらやましいです。賢治さんは自分の進むべき道を進んだからです。私はまだ進むべき道を探し当てていません。でも、いつかきっと見付けたいと思っています。そして、賢治さんのような人になりたいと思います。そうなれば生きている人として最高に思います。

とにかく本児はこの物語に接して大いに感化された一人である。作者への憧憬が根底にあるゆえ、読み取りでは深い想像をしていた児童である。次の児童の感想文は表現の仕方がおもしろい。

D児〈中位レベル〉

初めにこの物語の一場面を読んだとき、一つ一つの言葉が工夫されているなあと感じました。そして主人公は、ざんこくで、みえっぱりな悪い人だなあと頭におもいうかべてみました。

全文を読み終えたときには、二人のしんしはよい心になるかなあと思いましたが事実は反対でし

た。最後の場面の紙くずのようになった顔がもとにもどらなかったのです。わたしは、この作者は、紙くずという言葉を使って、この二人みたいな人は、この世界でごみみtainな存在というか、あなたたちは、紙くずみtainな価値のないものなんだということを強く言っているみたいに思いました。

E児〈中・下位レベル〉

ぼくは、紙くずみtainな顔がなぜ直らなかったのか疑問に思う。けれど、二人のしんしの性格をみるとその疑問はとけて、かえってあたりまえという感じになってくる。この二人は、ざんこくで、みえっばりのかっこつけ、それに、生き物をすぐに殺そうとしたり、金のことにはけちであったり、注文に対して、勝手に貴族にちかづけるとか勝手にかいしゃくしている。それに、とてもこわい目にあっているのに山鳥を買って帰るなど少しも反省していない。悪いところはたくさんでくる。良いところを探してみただけれど一つも出てこない。だから、紙くずのようになった顔はもとにもどらなかったのはある意味では作者の考えたばつだと思う。

本児はこのようにひとつのパラグラフ構成で一氣に自分の思いを書いている。本児は授業では、あまりやる気を示さずにいた一人であった。しかし、読み進めるにしたがって、徐々に意欲の高まりを示し、最後の場面での読みでは、積極的によい発言をして、担任を喜ばせていた一人である。

F児〈下位レベル〉

「注文の多い料理店」を初めて読みました。私の想像していた「料理屋」ではありませんでした。初めから最後まで通して読んだとき、やはり題が内容とがちがうように思いました。「こわい料理店」がぴったりだと思います。

私は、こういう不思議な話が大好きです。もしも、私がそんな料理店に行った場合、不思議だなあと思いながらも二人のしんしのようにどんどんと中へ入って行ったかも知れません。それは、この二人のしんしの気持ちが何となく分かるからです。おなかですいて死にそうなくらいですし、えらい人とも知り合いになることができるのですから。

でも、このお話でわたしがいやだなあと思ったことは、ふたりのしんしが食べられそうになったときです。らんぼうな二人ですが、食べられたらかわいそうです。二人のしんしはこれからきっとやさしい心、助け合う心をもつと思います。いえ、もってほしいと強く思います。だから、くしゃくしゃの顔をなおしてあげてほしいです。

本児は二人のしんしの立場に立って読み進めたようである。みえっばりで、ざんこくなところをもっていると同じ人間だから許すということが大切という発想の上になっているからである。この子なりに「二人にやさしい人間になってほしい」という望みを感想文に託しているのは高く評価したい。

どの子もその子なりの思い・考えを綴り、本作品を読んで成長している。

イ 意識調査から

右記表は単元の始まる前と終了した時点でアンケートした結果である。顕著な違いがみえたのは、①と④の項目である。

| 質 問 事 項 | は い | | どちらとも いえない | | いいえ | |
|-------------------------|-----|----|---------------|----|-----|----|
| | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 |
| ①あなたは読みの学習が好きになりましたか | 7 | 15 | 10 | 6 | 8 | 4 |
| ②あなたは音読や朗読が好きになりましたか | 9 | 11 | 10 | 10 | 6 | 4 |
| ③あなたは音読や朗読はかんたんだと思いますか | 5 | 3 | 11 | 9 | 9 | 14 |
| ④あなたはよい朗読ができるように努力しましたか | 13 | 19 | 3 | 3 | 9 | 3 |
| ⑤あなたは音読や朗読は大事だと思いますか | 20 | 19 | 3 | 4 | 2 | 2 |

①の場合は、

「はい」と答えた児童は終了時では15人と2倍にもふくれている。それに、④でも19人と6人が「はい」に回答を増やしている。つまり、努力しようとする意欲が結果的に読みの学習を楽しくさせ、態度面の変革につながっているものと読み取ることができる。

(2) 成果と課題

ア 朗読を主体にした読み取りは効果的であったか。

6年レベルで求める朗読の力は「聞き手にも内容がよく味わえるような朗読力」である。ただし、この力はいきなり付くものではない。朗読の段階レベルとしては、①伝える読み、②分かる読み、③味わえる読みの3段階をセッティングしているが、①・②を経て初めて③に至るととらえている。

ところで、本単元では理解力を主たる目標としながら表現力の育成を相俟って育てることに留意している。本来、朗読はこの両面の性質を有するがゆえに効果が大きいと考える。ここに着眼したことは、実際、児童の読みへの意欲を生み、文章の細かい点にまで気配りして、自分の感性を投入して味わいのある読みの力の育成へとつながっている。

(ア) 場面の様子の具現化について

2か所にある「風がどうとふいてきて、草はザワザワ木の葉はカサカサ、木はゴトンゴトンと鳴りました。」の読みがポイントとなった。同じ文章でありながら、前者は現実の世界から幻想の世界への誘いであり、後者は逆になっている。インプットとアウトプットの違いは、全文のイントネーション、ポーズがかぎになり、中・上位レベルの子供による読みの工夫により、みごとに場面の転換の様子を表現することができていた。

工夫に当たっては該当文章がいくつかある中で重要な役割を担っている一つを取り上げて工夫することで様子が浮き彫りにされてくるので、あれもこれもと選定しない方がよいと思われる。

(イ) 人物の言動の実際化について

低学年であれば動作化と音読をミックスさせて人物の思いと一体化させる方法があるが、高学年ではあくまでも文字や文章から受ける印象、想像を音声化することを基盤にしている。したがって、プロソディーが文章表現のカギを握る。子供たちは、このことを認識し、二人の若い紳士の会話文のやりとりや行動描写において、その人物の思いがよく伝わってくるような読みを工夫していた。ただし、すべて

の子供は「味わえる読み」のレベルには達していなかったのが実情である。これは、本文を小出しに提示していったため、作品を丸ごと理解した読みを表現できたのは、最後の場面読みにいたってからである。この点は課題として残っている。

（ウ）物語の内容の一体化について

（イ）と同様に全文を把握したのは最後の場面であったので、実際に一体化した読みの表れは、朗読発表会の折りであった。ただし、それほど難しい文章ではないので、各場面読みにおいても、朗読による内容理解の活動は十分可能なので、味わい読みの推奨はしていきたい。

また、自分なりの感想をもつことが、さらに朗読力に磨きがかかる要因ともなるので、感想を重視することも併せもって留意したいことである。

イ 音読・朗読指導ステップの効能はどうか。

ここでは特に「第3ステップ」にウエイトを置き、読みの表現を通して正確な理解の力を付ける方法をとったわけであるが、決して、第1・2ステップをおろそかにしたわけではない。単元の最初は、指導ステップを踏まえ、読みへの意欲倍加と読みなれとともにその比重を移行していったのである。このプログラミングは児童の読みへの積極性と読み取りの確かさから判断するに効果的であったと考える。ただし、教材によって必ずしもこの方法があてはまるとは限らないので留意したい。

「豊かな読み」の三つの観点は、指導要領に即して、「伝える読み」「分かる読み」「味わえる読み」として、自分なりの読みは総合的に発展的に位置付けることが指導の道筋としては自然のように思える。改善の方向で考えたい。

ウ 教材文と教材文の与え方は児童の読みの意欲を高めることにつながったか。

「注文の多い料理店」というタイトル自体はごく平凡なものであるが、実際内容に触れてみると言葉の真意が分かっておもしろい作品である。それだけに、今回のように小出しに次の展開を予想しながら・期待しながら読み進めたことは読みへの意識の継続化につながり、読み終えた時の成就感・満足感に結び付いたことはまちがいない。

もっともこれは内容的に展開のおもしろさをもつ作品であればこそ採用できる方法である。ただし、最初から全文を与えたケースを授業検証をしていないので比較検討はここではできない。

エ 音読評価カードは効率的に機能を働かせたか。

読み取りに主体をおいたので、読み取りをフォローし、支える働きを有するカードの活用が不活発であったことは否めない。授業時間において取り上げた回数が少なかったことからそれは言える。ただし、児童からの家庭音読カードの提示には明らかに音読力の向上がみえていた。また、音読カルテは計画的に使用し、指名等に生かし授業の深まりに役に立った。

評価は、自己評価と教師評価の両面を採用し、どちらかにかたよることのないように配慮したいと考える。

授業を終えてみて、一人一人の子供がその子なりに「国語への学習意欲を増している」「確かな理解力を付けている」「音読・朗読の良さを感得している」等の変容がみられたことは大きな喜びである。